

Rotary



世界に希望を生み出そう

CREATE HOPE in the WORLD



国際ロータリー 第2550地区

宇都宮東ロータリークラブ会報

<http://www.ri2550uerc.gr.jp/>

会 長 石川 元信

幹 事 谷田部 修

会報・雑誌委員長 田崎 信孝

例会場 宇都宮市大通り2-4-6 ホテルニューイタヤ

例会日 毎週火曜日(12:30~)

事務局 ホテルニューイタヤ内 宇都宮東ロータリークラブ TEL.028-638-5125 FAX:5128

通算3034号 2024年2月13日(晴れ) 第30回例会 会員数103名

## ハイブリッド例会



点 鐘 石川(元) 会長

司 会 副SAA 杉本会員

◇国歌「君が代」

◇ロータリーソング「四つのテスト」

◇本日のランチ 小付 焼物 メンチカツサラダ添え  
香の物 汁 御飯 デザート

## ビジター紹介

小林(正) 副会長

◇サイクルスポーツマネージメント(株)

代表取締役社長 柿沼 章 様



## 会長挨拶

石川(元) 会長

皆様、こんにちは。はじめに報告がございます。先週、インターシティーミーティングが行われ、10名程が参加いたしました。もう少し多くの会員の方に参加していただければよかったですと思います。講演として宇都宮大学国際学部教授の高橋若菜先生から「気候危機と、脱酸素を通じた地域発展の可能性」の話がありました。また、ガバナーより、ポリオ撲滅の募金活動について、2550地区全クラブが一丸となって、特に、宇都宮の10クラブが率先してまとめ、取り組むことができたことへの謝辞が述べられました。

今日はサイクルスポーツマネージメント(株)の柿沼様から卓話をいただきます。サイクルということで、歴史のこぼれ話ですが、第15代将軍、徳川慶喜は新しいものが好きで、よくいうのは、写真が趣味だったそうです。東京の小石川に住むことになってからは、いち早く自転車に乗り始め、どこに行くにも自転車に乗って、銀座、丸の内、日本橋辺りの写真を撮っていたとのこと。明治の頃から日本人は自転車に親しんできたということで、ちょっとしたこぼれ話でした。本日はお

話を期待しています。

◇石川和重会員からご挨拶

先日は母の葬儀に際しまして、多数の方のご参列、心遣い、受付のお手伝い等をして頂き、誠にありがとうございました。無事に、滞りなく送り出すことができました。

◇スウェーデン訪問の報告 細谷会長エレクト

先週、当クラブから財団留学生としてスウェーデンのストックホルムに送り出している、山田有紗さんのところへ訪問致しました。先方のスウェーデンのロータリークラブにメーキャップし、バナー交換いたしましたので、会長にお渡しいたします。こちらのクラブは会員数20名位なのですが、留学生を10名位お世話しているとのこと、カルチャーショックを受けました。自分たちも少し頑張らなければいけないな、と感じました。



## 幹事報告

谷田部(修) 幹事

◇ロータリーレート 2月は1ドル147円。

◇2月は「平和構築と紛争予防月間」。財団寄付はこのためにも活用されますので、ご協力を。

◇本日18時30分~ ホテルニューイタヤにて 石川年度第8回定例理事会開催。

◇レターBOXにR財団寄付・米山寄付の確定申告用の領収書配布。

◇(株)クマヒラ「抜萃のつづり」レターBOXに配付。



## 委員会報告

◇スマイルボックス委員会 関副委員長

石川和重会員 ※例会にてご挨拶あり

◇出席委員会

黒澤委員長

&lt;皆出席表彰・1月分&gt;

通算28年 八城 光男会員

通算24年 田崎 信孝会員  
連続11年 佐々木貞雄会員  
連続9年 田原 聖会員  
連続8年 谷田部 修会員  
連続6年 中山 靖之会員  
連続5年 原 賢一会員  
連続5年 飯村 尚志会員  
連続4年 平出 直会員  
連続2年 駒場 洋助会員  
連続2年 杉本 充彦会員  
連続1年 石川 和重会員

◇親睦委員会

山崎副委員長

<誕生祝い・2月>

会員誕生

飯泉 修一、川村 壽文、菊地 憲寿、  
荻原 耕三、田嶋 宏章、床井 光雄、  
薄井 晃、若井 勲

各会員

夫人誕生

富貴塚真人、船田 元、郡司 公生、  
片山 幸志、駒場 洋助、大木八千雄、  
佐々木 正、若井 勲、渡邊 和裕  
各会員の奥様



卓 話

「宇都宮ブリッツェンの運営」  
サイクルスポーツマネジメント(株)



代表取締役社長 柿沼 章 様

皆様、こんにちは。本日は宇都宮ブリッツェンの運営についてご紹介させていただきます。また、先ほどの会長の話ですが、徳川家という座敷にいる、といったイメージだったので、びっくりしました。私自身がいかにか「固定概念」を持っているかを感じたのですが、今日は、「固定概念」を打破しようとしている、という話もさせていただきたいと思っています。

— パワーポイントにて説明 —

宇都宮ブリッツェン、サイクルスポーツマネジメント(株)は15年間活動させていただき、新しい年を迎えることができました。会社設立はリーマンショックの年で、当時私も競技者あがりということで、世の中の経済について何もわかりませ

んでした。会社を発足するにあたり、前砂川社長はじめ、今日お集りの皆様の中にも、設立当初からチームを応援して下さった方々がいらっしゃいます。皆様のお力があって、なんとか15年活動してきた、というのが正直なところでございます。そんな中でも選手達に恵まれ、東京オリンピックに選手を輩出したり、数あるタイトルを獲得するなど、非常に強いチームに成長させていただくことができたと思っています。ただ、日本一のチームになることを実現していくに伴って感じてきたギャップがあります。強くなって日本一になったら、皆様に支持していただけて、会社の方もどんどん良くなっていくかと思っていましたが、そんなに簡単なものではありませんでした。競技だけではなかなか皆様に情報が届きませんので、自転車という切り口を通じて、様々な活動をさせていただいております。自転車は、交通でありますし、環境問題のキーワード、健康増進ツール、子どもの自立促進ツールだったりします。ブリッツェンは、なんでも自転車に関わる場所には顔を出して、お役にたとうと活動してきました。また、学校の部活に「自転車部」というのは少なく、全国の高校で約250、中学にはありません。競技人口も少なく、自転車を生業にする人も少ないわけです。野球、サッカー、バスケ、水泳等と比べると自転車はまだまだです。そこで、私たちは、ジュニアの育成クラブを作る活動をし、継続させていこうと思っています。

我々のスポーツも、サッカーや野球のように春から秋にかけて活動するスポーツです。まもなく3月から、日本におきましても開幕となります。選手は11名所属していますが、今年から、チーム史上初となる、コロンビアの選手を獲得いたしました。日本の自転車界も国際化の流れがあり、それに乗ることを決断させていただきました。ただ、日本初の地域型チームとして設立された我々です。先ほどの育成部門には会社としてかなり注力をしてございます。そんな2024年の体制ではじまりましたが、3月の開幕で、真岡芳賀ロードレースと翌日の宇都宮清原クリテリウムの2日間の大会を開催させていただきます。これは、中央の自転車連盟と我々の会社を中心の実行委員会で主催するものとなります。清原クリテリウムは12回目になります。弊社の砂川前社長と当時の栃木テレビの吉澤社長が、秋のジャパンカップだけでは県民の皆様への情報伝達が少ないということで、肝いりで作った事業です。真岡芳賀ロードレースは今年で4回目になります。砂川前社長が地域住民の方への説明に、コース沿線のお宅一軒一軒「この大会をやらせて下さい」と周りました。会社が続く限りこの大会を大事にしていき

いと思っています。

今年はひとつトピックスがあります。LRTが開通しましたが、レースとLRTの路線が重なるところがあり、同時に走るということになります。これは日本でも初のことです。また、3月中旬からブリッツェンのラッピングをしたLRTが走ります。今年はLRTとのコラボレーションをひとつのポイントとして大会の運営をしていきたいと思っています。こうしたプロモーションだけでなく、小学生のお子様を招待したいと思っています。下野新聞に「子どもと貧困」というテーマで何度も記事がでていますが、スポーツは社会課題とともにあると思っていますので、そこに一部寄与するような活動ができないかと思っています。私たちの選手が来週施設に訪問するのですが、その時に「3月のレースに、LRTで見に行こうよ」とご招待しようと思っています。

百聞は一見に如かず、ということで、レースの映像（2019年宇都宮クリテリウム）をお見せしたいと思います。

#### － 大迫力のレースの鑑賞 －

我々が運営しているのは自転車のスポーツチームですが、自転車、スポーツの話だけをしていたのでは、なかなか世の中で認めてくださらないと思っています。様々な切り口で情報を発信し、関心を持ってくれたお客様が結果的にブリッツェンの方に向いてくださる、そういうベクトルを持っていただけるプロモーションを、チーム、選手、スタッフ揃ってやっていこう、という考えでおります。その中のひとつの事例として、先日、秋のジャパンカップのニュースが日経にあり、過去最高の31億円の経済効果があったということです。経済効果というのは非常にわかりやすい指標だと思います。また一方で、自分たちで思うスポーツの価値を発信したいと長年思っていました。市民の皆様、地元企業様、我々プロスポーツチームの三者がどういうふうに作用し合っているか、共同研究として宇都宮大学さんに関わっていただい

ております。環境・福祉、健康、教育、施策影響、地域という5つの指標で、このスポーツが地域にとってどういう効果があるのか、宇大の学生さんの卒論のテーマとして、継続的に研究していただいています。弊社としてもいろいろな取り組みをしております。つい最近ですと、健康増進のためのサイクリングツアーを、大谷を拠点にやらせていただきました。

私たち宇都宮ブリッツェンは、将来的に何を目指していくのか、ということですが、最終的には、栃木県の、宇都宮の、自転車を通じたカルチャー、文化創造を考えています。そのためには幾つかのステップを踏んでいます。競技の世界ではツール・ド・フランスが最高峰なのですが、宇都宮というチーム名のまま、ツール・ド・フランスに出たならば、どれだけ県民の皆様に喜んでいただけるかな、というのがあります。一番をとってすごいだらう、ということではなく、栃木県に宇都宮に文化として繁栄されてこそ完成形だと思っています。我々の存在意義かなと思っています。次はアジアで一番のチームに、また何年か先にはツール・ド・フランスという世界最高峰のところまでいきたいと思っています。先ほどの会長の話に繋がるのですが、これまで、日本の自転車関係にまつわる選手含め、「俺はツール・ド・フランスに行くぞ」と言い切った人は少ないです。ですが、それを言い切れないことは不自然だと思っています。我々が思い描いている自転車の世界のトップは、思っているよりは遠くないはずだと思っています。本気を出したら絶対に行けると思っていますので、世界に向けて、我々は大きな夢をいだけて頑張っていきたいと思っています。「シンク・グロバリーアクト・ローカリー」という言葉がありまして、大きなことを思い描きますが、毎日やることはコツコツしたことです。継続して、宇都宮の皆様、栃木の皆様に誇りに思ってもらえるようなチームになりたいと思っています。